

ユーリア・エンゲストローム

拡張による 学習

活動理論からのアプローチ

Yrjö Engeström

LEARNING BY EXPANDING

【訳】

山住勝広／松下佳代

百合草禎二／保坂裕子

庄井良信／手取義宏／高橋 登



新曜社

リ
ト
ヴ
ア、
ユ
リ
イ、
タ
ト
ウ
に

Yrjö Engeström

LEARNING BY EXPANDING

An activity-theoretical approach to developmental research

Copyright © 1987 by Yrjö Engeström.

All rights reserved.

Japanese translation is published with permission from Yrjö Engeström.

本書『拡張による学習』は、集団的な創造活動について述べている。私のテーマは、私たちが人間として、自分たちの制度や行為を転換できなければならないこと、しかも徹底して、あらゆる参加者の知性とエネルギーを結集してそうでなければならぬということにある。そのとき、創造性は、まさに集団的な転換への実践的な参加として理解されるだろう。さまざまな学習理論が人間の行動や認知における永続的な変化を説明しようとしてきたが、未だ次のような問題の核心には届いていない。すなわち、人々は自らの周りの状況を変えることによって、いかに自分たち自身を変えることができるのか、という問題である。この問い、これこそが拡張的学習という新しい理論が求められるゆえんなのである。

この書が七人の日本の研究者によって翻訳されたことに、私は感銘を覚えている。そのような協同による取り組みは、ヨーロッパやアメリカではめつたに見られないからである。おそらく、このことは、本書のアイデアと日本の文化のある種の側面が一致しているということの、可能性を示している。このようにして、本書は、多数の^{ヴェイス}声というもの、そして異なった活動システムのネットワークを建設するということにも関わっている。グローバル・エコノミーがますます拡大していくなかにあって、

拡張的学習は国家や文化の境界を超えた運動や協同として研究され促進されるに違いない。

「拡張による学習」の日本における翻訳者たちと出版社に感謝申し上げたい。本書が拡張的な対話と協同への誘いとして読まれることを願いつつ。

サンディエゴにて

ユーリア・エンゲストローム

謝 辞

本書の研究とその成果を執筆していたあいだに、エリック・A・ニスカネン教授とセツポ・コンティアイネン教授からいただいた励ましと有益なご意見に感謝申し上げます。ヘルシンキ大学の教育研究所とラハティ教育・訓練センターは、この仕事をさまざまな形で援助してくださった。教育研究所の成人教育グループは、つねに刺激的な社会環境だった。フィンランド・アカデミーは、まず専任の研究ポストを提供してくださり、さらには出張経費を負担して、研究費を提供してくださった。私はまた、クラウス・ヘルカマ、ルリイ・ロンコネン、そしてユハニ・スワアルティからの批評と提案にお礼を申し上げます。

活動の文化―歴史的な概念、そしてそれを分析と発達の介入の単位としていく考え方に触発された研究は、学際的・国際的・拡張的な研究動向となつていくが、そのなかにあつて、本書はささやかな踏み石の一つに過ぎない。私は、この仕事のさまざまな局面で得ることのできた、次の人たちの意見、批評、刺激的なアイデアに特に感謝している。セス・チェイクリン、マイケル・コール、V・V・ダヴィドフ、リトヴァ・エンゲストローム、ペント・フィツシナー、ペグ・グリヒン、テルト・グラーン、ペンティ・ハツカライネン、マリアーナ・ヘデゴール、マーティン・ヒルデブランド・ニル

ソン、エド・ハッチンズ、ウフェ・ユール・イエンセン、ユハヒム・ロンプシャー、デイヴィッド・ミドルトン、レイエ・ミエティネン、レナ・ノロス、ミハイル・オツテ、アルネ・ライエテル、ゲオルク・ルックリーム、フォルク・シーゲル、ベルテル・シュラル、カリ・トイカ、ヤッコ・ビルクネン、そしてジェームス・V・ワーチ。

発達のワーク・リサーチのグループ全体が、ずっとこの仕事にとって決定的に重要なミクロコスモスだった。

ヘルシンキ

1987年5月

Y・E

目次

日本語版へのまえがき 1

謝辞 iii

第1章

拡張による学習——十年の後に

- 1 自分史からの覚え書き 1
- 2 活動理論の三つの世代 2
- 3 応用としての発達のワーク・リサーチ 5
- 4 発達における水平的なものと垂直的なもの 6
- 5 拡張的学習のサイクルにおける多様なスケール 12

6 ユートピアン・メソドロジーへ向けて 14

第二章

人間の学習の歴史的形式としての学習活動の出現

1 活動の三角形 21

2 第一の思潮——パースからボパーへ 26

3 第二の思潮——ミードからトレヴァーセンへ 39

4 第三の思潮——ヴィゴツキーからレオンチェフへ 51

5 活動の進化 73

6 人間活動の内的矛盾 84

7 人間の学習の文化的進化 96

 第一の潮流——学校教育における学習 100

 第二の潮流——労働活動のなかでの学習 113

 第三の潮流——科学と芸術における学習 129

8 学習活動の構造 140

第3章

拡張的研究の基本的カテゴリーとしての最近接発達領域

- | | | |
|----|----------------------------------|-----|
| 9 | メタ認知と学習活動の主体 | 144 |
| 10 | 個体発生における学習活動の出現 | 149 |
| 11 | 第一の仲介的バランス | 157 |
| 1 | 発達心理学の二つの古典的ジレンマ | 159 |
| 2 | 学習のレベル | 163 |
| 3 | 学習と発達 | 168 |
| 4 | 個人的発達と社会的発達 | 187 |
| 5 | 新しいものはいかにして生成されるか | 196 |
| 6 | 最近接発達領域 | 204 |
| 7 | 最近接発達領域を渡る道程としての「ハックルベリー・フィンの冒険」 | 213 |
| 8 | 理論的教訓 | 228 |
| 9 | 第二の仲介的バランス | 239 |

拡張の道具

- 1 これまでの議論 241
- 2 拡張的思考の道具としてのモデル 242
- 3 理論的思考におけるモデルの機能についての提起と問い 246
- 4 拡張的移行の事例としての周期律発見 251
- 5 もうひとつの例——核分裂からマンハッタン計画へ 263
- 6 活動と拡張的移行の歴史的タイプ 276
- 7 第二の道具の体系化 285
- スプリングボード 285
- モデル 287
- マイクロコスモス 297
- 8 拡張への第三の道具を求めて 297
- 9 候補としての形式的弁証法 303
- 10 実体の弁証法 308

11	社会性と拡張——徒弟制からポリフォニーへ	315
12	第三の仲介的バランス	324

第5章

拡張的方法論に向けて

1	文化・歴史的な方法論のサイクル	
	——ツイゴツキ、スクリプナー、コール	327
2	拡張的方法論のサイクル	331
3	活動システムの現象学的観察と記述	334
4	活動の分析	335
5	新たな道具の形成	339
6	新たな道具の実践的な適用	348
7	報告	350
8	最終的なバランス	351

訳者あとがき

355

文献

(17)

訳注

(11)

事項索引

(4)

人名索引

(1)